3/3

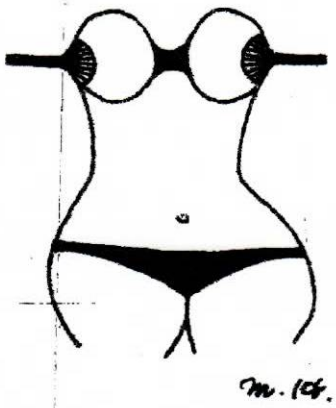
[縄文タイ物語]シリーズ（38）

バンコクの紅い日々(7)

土井 浩

バンコクで謹賀新年

「お正月はワンパカへ来ない！」と泰子が携帯へ電話してきた。オークウッドで独りの新年も寂しいから行くことにする。大学は年末の２９日から１月２日まで休み。BTS のモチット駅からタクシーでワンパカハウスへ着くと、泰子の家には日本から病院時代の女友達が来ていた。西垣啓子さん。Ｔシャツにジーパン姿でチャキチャキの大阪娘かと思ったら実は泰子と同年配らしい。「私淡路に住んでるの」「淡路島に？」「阪急の淡路駅よ」弘之は急に懐かしくなった。阪急淡路駅の近くに日東化成という弘之が長年関係していた会社があってその辺の地理はよく知っていた。「小田さんのところには徳永さんも居るのよ」と泰子が言った。「えっ、徳永さん、まだバンコクに居たの？」弘之はやや驚いた。テニスの徳永さんがまだ居るのだ。弘之はこの間の徳永さんのゆったりした返球を思い出した「テニスで一汗流そうよ」泰子が弘之の気持ちを察するように言った。バンコクの大晦日の午前中はギラギラと太陽が照りつける暑さである。赤褐色のライニングをしたテニスコートは焼けていた。　徳永さんと小田さんそして泰子と弘之が組んで混合ダブルスで打ち合った。それでも一時間ほどすると弘之は足がもつれてきた。　「プールで泳ごう！」また泰子が言い出した。ワンパカハウスの中庭には２５メートルプールがあっていつも澄んだ水があふれていた。弘之は水泳が得意だった。少年時代には瀬戸内海の小島へ友達４～５人で渡って１週間もキャンプし、１日中泳いでいたこともある。水着に着替えた泰子を見て弘之は驚いた。小柄な康子の太腿が異常に大きいのである。短い脚の締まった足首からまるで団扇のように広がった大腿である。その強力なキックで泰子は驚くべき速さで２５メートルを一気に泳ぎ抜けた。弘之をはじめ小田さんも徳永さんも唖然として眺めていた。「職業柄当然よ」と西垣さんは平然と言った。看護婦という職業は力仕事なのである。バンコクの大晦日の正午だった。



（つづく）

（イラスト：保倉勝美）

[King Mongkut's 大学　農学博士]

2/3

[縄文タイ物語]シリーズ(34)

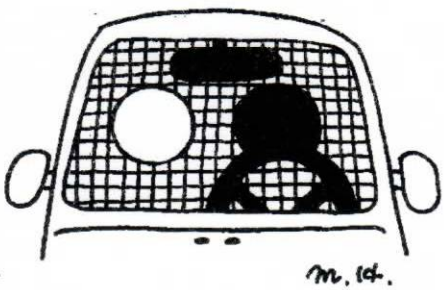
バンコクの紅い日々(3)

土井 浩

ノンタブリの休日

「サタニー チョンノンシー」弘之がオークウッド・レジデンス正面の車寄せでタクシーに乗り込みながらそう言うと中国系の顔をした運転手はちょっと渋い顔をして黙ってギアをDに入れた。バンコク高架鉄道BTSのチョンノンシー駅は弘之の住んでいるマンションから2 Kmほどのところにある最寄りの駅である。タクシーで35バーツ(105円)ほどだから運転手もいい顔はしない。弘之はチョンノンシー駅の切符売り場で「シーシップ バーツ」(40バーツ)と言ってBTSの専用コインを買い、コイン販売機へ投入して40バーツのカードを出した。BTSの切符は日本のJRや地下鉄の通勤定期ほどもある立派な磁気性のカードである。これを1回の乗車切符として使う。

金曜日の夕刻のBTSは役所や会社帰りのサラリーマンや身なりの良い学生達でかなり混んでいた。1年ほど前に開通したBTSは割高感がありバンコクでもお金にゆとりのある人達しか乗らない。そうは言ってもBTSの南のターミナルであるタクシン駅から北ターミナルのモチット駅まで乗っても40バーツ(120円)ほどなのである。



弘之はバンコクの中心街にあるサイアム駅でスクンビット線に乗り換えて20分ほどでモチット駅へ着いた。バンコクの北西部にあるモチット駅から弘之は再びタクシーを拾って「トラキットバンデイット」(バンデイット専門学校へ)と言うと運転手は「カップ」(はい)と答えて走り出した。バンコクへ来て半年になり、発音の難しいタイ語がようやく通じるようになったと弘之は嬉しくなった。泰子の住んでいるワンパカハウスはバンデイット専門学校のすぐ近くにある。ワンパカハウスは元裁判官が建てた高級マンションで現在は日本語の達者な娘のロイさんが管理している。ワンパカの住人は日本人や欧米人がほとんどで家賃も35,000バーツ(105,000円)と非常に高い。バンコクの中心街でもタイ人のアパートはせいぜい3,000バーツほどだからバンコク郊外のノンタブリの町でこの値段が取れるのは外国人しかいない。弘之がタクシーの窓から顔を出すと守衛のソムチャイさんが「サワデイー カップ」と笑顔で挨拶した。「早かったネ」と泰子は嬉しそうに弘之を迎え入れた。(つづく)

(イラスト:保倉勝美)

[King Mongkut's大学 農学博士]